

日本画家 平松 礼二氏に聞く

聞き手 山岡 三子 ●フリーアナウンサー、名古屋短期大学客員教授

山岡 本日、お話を聞きするのは、二世紀を代表する日本画家の平松礼二さんです。

一九六〇年に青龍社展での初入選・受賞を皮切りに、日本画家の登竜門と言われる第一〇回山種美術館賞展大賞、MOA美術館岡田茂吉賞大賞、第五七回中日文化賞など、数々の賞を受賞されました。

また、『文藝春秋』誌の二〇〇〇年新年特別号から一一年間、一三二回にわたって表紙画を担当するなど、現代日本画壇の第一線で活躍されています。

絵の素材はアトリエを囲む庭の花や木々夫婦で取り組む庭造り

山岡 本日は、軽井沢にある平松先生のアトリエにお邪魔しています。先ほど、アトリエに入る前に、お庭を見せていただいたのですが、みごとなすつらえですっかり魅了されました。

平松 僕にとって、庭は絵の大切な素材の一部なんです。だから、庭造りには力を入れてきました。

もともとこの辺りはうっそうとした雑木

林だったんですが、家内と少しずつ手を加えて、一〇年ぐらいかかって、何とかいい環境で絵を描けるようになってきました。

山岡 奥様と共に庭造りに励まれたなんて、すてきなお話です。

平松 とはいえ、お互いに好みがありましてね。門から玄関にかけては、色とりどりの草花が植わっているでしょう。あれは家内の領域なんです。

一方、このアトリエの周囲は、桜を中心に、花を咲かせる樹木ばかりで、こちらは僕の領域。はつきりと分かれていて、僕はこれを「愛の三八度線」と呼んでいます（笑）。お互い、庭造りに関しては干渉しない主義なんです。

山岡 池もすばらしいですね。先生が長年、絵のモチーフにされてきた睡蓮の花も咲いていました。

平松 あれは、クロード・モネが手植えた睡蓮なんですよ。

長年管理しているクロード・モネ財団から友情の印ということで、株分けしていただいたものです。今まさによく咲いています。



平松 礼二氏（左）と山岡 三子さん（2014年8月6日 軽井沢・平松氏アトリエにて）

**哲学性、装飾性を一体に織り込む
自由な美の形式が現代日本画の特徴**

山岡 昨年は、そのクロード・モネの聖地でもあるフランス・ジヴェルニーの「ジヴェルニー印象派美術館」で、「平松礼二・睡蓮の池・モネへのオマージュ」展を開かれたとうかがいました。

来場者数は同館始まって以来の約七万四〇〇〇人に上り、大反響を巻き起こしたとお聞きしています。

平松 モネのおかげでもあるでしょうが、もう一つ、ヨーロッパの人たちが日本人に対するあこがれをもっているという点も大きかったように思います。

ヨーロッパは、絵画にしろ、建築にしろ、バースペクティブ（遠近法）が基本的な要素になっています。日本はどちらかと言えばフリーハンドの文化で、その中に哲学性、装飾性を一体に織り込んでいく。ヨーロッパのメカニズムにない、そうした自由な美の形式が、彼らにとって魅力的に映ったというところもあるのではないのでしょうか。とはいえ、現役の日本画家の展覧会が、

ヨーロッパの公的な施設で開催されること自体、極めて珍しいことでしたから、当初は不安がありました。

山岡 内外から高い評価を受けていらっしゃる平松先生でも、不安を抱えていたとは意外です。どのような不安をおもちだったのでしょうか。

平松 日本画という点、ヨーロッパの人たちには、葛飾北斎や安藤広重など、江戸の絵師たちの浮世絵版画のイメージが強いんです。

実際、モネをはじめフランスの印象派の画家たちに影響を与え、それがジャポニスムとして、世界中に広まったわけですが、今やそれから一三〇年もの時を経ています。そうした中で、発表機会の少ない現代日本画がヨーロッパの方々に入れられるかどうかという懸念が強くありました。

そうした懸念とともに、僕自身の気持ちの中に、ヨーロッパ文化に萎縮する部分があったことも事実です。

ヨーロッパ文化は、基本的に重層的でしょう。アングロサクソン、ゲルマン、ラテンと、民族は違えど、同じ陸続きの地域で

暮らしている。さらに、各国が距離的に近いために、つねに人や物が行き交っている。そのために、文化の層が極めて厚く、多重ですから、いつも新しい発見が生まれる土壌がある。

その点、日本は独特な文化が築かれているとはいえず、多重的とは言えない。日本にはない、ヨーロッパ文化の重層性に対して縮こまる気持ちがどうしてもぬぐえなかったわけです。

ヨーロッパ、フランスで受け入れられた 日本流のありのまま

山岡 そうした中で、今回の展覧会では、二五点もの新作を出品されました。制作されるうえで、どのような苦勞があったのでしょうか。

平松 もともと今回の作品は日本で発表するために構想していたものでした。つまり、フランスでの発表とは関係なく、自分のこれまでの問題意識に基づいて、構想を固めていたんです。

それがフランスでの展覧会の開催が決まり、実際に仕上げる段階になってくると、

新たな悩みが出てきました。これでフランスの人は評価してくれるだろうか。

悩んだあげく、あえてヨーロッパ向きの絵を描くのは自分の性分に合わない。開き直って、ありのままの作品を発表するほうが自然ではないかと考えるようになりました。そして、日本流でいこう、ありのままの自分を表現しよう、と、結論づけたんです。結果としては、これだけの人に来ていたのだいたわけですから、堂々と日本流を貫いてよかったと思います。僕にとっては予想外のことでしたが。

山岡 今回出品した作品のほとんどは、ジヴェルニー印象派美術館のコレクションになったそうですね。

平松 描き手としては、作品が自分の手から離れるということは、とても寂しい、残念な気持ちでもあるんです。しかし、それによって海外の多くの人に見ていただくことになった。今は残念なような、うれしいような複雑な気持ちです。

山岡 早速、今年、ドイツのベルリン国立アジア美術館で、巡回展にあたる展覧会が開催されることになりました。

平松 先日、その開会式に招かれ、ドイツを訪れてみて驚いたことは、同じヨーロッパでも、ドイツ人は、ほかの民族と比べて体格が全然違う。男性は僕よりも首二つぐらい大きい人ばかり。そのせいか、会場のベルリン国立アジア美術館は、堂々とした、広々とした美術館でした。

山岡 開会式ではどのようなあいさつをされたのでしょうか。

平松 今回は当初から原稿を用意しませんでした。あらかじめ話題を用意すると、自分の言葉ではなくなってしまう。やはりあいさつも、ありのままの自分の思いを直接ぶつけたほうがいいと思いました。それでふと思いついて、こんな話をしたんです。自分は二〇年近く前に、ある革靴を買った。その靴を履いて、セーヌ川を上ったり下ったりしながら、フランスの印象派について、ずいぶん取材を重ねてきた。その靴は今でも履き続けている。そして、この靴が僕を、フランス経由であこがれのドイツまで連れてきてくれた。とてもありがたいと思っています。

とっさにその靴を脱いで、皆さんに示し

ながら、そのようにあいさつしたんです。ドイツは職人の国ですから、ずいぶん感銘を受けてくれたようでした。

山岡 今回の展覧会の作品の骨格となった「印象派・ジャポニスムシリーズ」は、平松さんが二〇年間探求されてきたテーマとのことですが、長年にわたって制作されることになった、きっかけは何だったのでしょうか。

平松 五〇歳のころ、パリで個展を開いたときに、オランジュリー美術館を訪れて出合ったモネの「睡蓮」の大連作に、大きな衝撃を受けたんです。というのも、まるで日本人の絵師が描いた、日本の絵巻物のような作品だったものだから。

そのときに抱いた疑問は、「なぜ、モネのような印象派の巨匠が、日本画を大胆に取り入れた作品をつくったのか」ということでした。

もちろん、すぐに答えを得られるはずのない疑問でしたので、自分の終生のテーマに据え、彼らの足跡を訪ねて、方々を回るとともに、自分でも実際に描いてみることにしたわけです。

それが、印象派の画家たちが描いた風景を日本画で表現する「印象派・ジャポニスムシリーズ」に結びついていきました。

山岡 ある種の偶然から発したことなくですね。

平松 もう予想外の連続です。僕は割としつこい性格ですので、二〇年以上制作し続けてきたのですが、その成果をまとめた画集が、たまたまジヴェルニー印象派美術館のカンディール館長の目に留まり、大いに関心を寄せてくれたことが、今回の展覧会の開催につながりました。思いもよらないことでしたが、本当に不思議な縁で導かれたという思いです。

山岡 その背景には、やはり一步一步、ご自身の道を貫かれてきた、歩まれてきたということがあるわけですね。そうした生き方自体に、平松さんが長年追い求められた「路」のシリーズの作品群との関連を感じてしまいます。

ところで、ここから先生のライフヒストリーについてもお聞きしていきたいと思えます。先ほど、ご自身を「しつこい性格」とおっしゃいました。それは小さいころか

らでいらっしやいますか。

平松 こと文化芸術に関することはそうですね。一度食いついたら離さないぞという気構えは昔からありました。

ただ、それ以外のことに關しては執着はないんです。スポーツをやっても三日坊主でした。でも、大好きな絵に關しては一切妥協することはありませんでした。

両親に相談しなかった 美術科のある高校への転校

山岡 それが象徴的に表れているのが高校時代の転校に關するエピソードで、一度は普通高校に入学するものの、どうしても絵を描きたいと、ご両親にも相談せずに美術科のある愛知県立旭丘高校に転校されたのですよね。

平松 絵に關しては、一度目指したら何が何でもという強い意志がありました。たとえ親に殴られようが、それが悪いことだとは思わなかったんです。

山岡 實際に、怒られたのですか。

平松 それはもう、すごく怒られました。ある日、連う校章をつけているのを姉に

山岡 三子さん



見とがめられてしまったんです。外しておけばいいのに、つけたままで帰宅してしまつて、すべて露見してしまいました。

それで怒られたわけですが、過ぎた今となつてはいい思い出です。とにかく、一五一六歳のころは、将来は画家になりたいという以外、何も考えていませんでした。

山岡 その年頃で、一生の夢をもつというのは、極めて難しいことなのではないかと思うのですが。

平松 やはり絵が好きだったということでしょうね。

それと父親への反発もありました。父は法務省の職員で、子の僕にもそうした生き方を押しつけるところがあったんです。二

言目には「まじめに生きろ」と言う人間でしたので、父への反発がよいに絵の世界へ逃げたくなった理由であるという面もあったと思います。

廃墟のような風景にひかれた青年期

山岡 当時はどのような絵を描いていたのですか。

平松 僕は名古屋に住んでいましたから、中川運河や堀川、そしてそこに浮かぶ廃船あるいは焼け焦げたセロハン工場。そうした廃墟のような風景ばかり描いていた記憶があります。

その廃れた感じに、絵画的な美しさを感じたんです。旭丘高校に移ってから、さらに猛烈に描きましたから、作品はかなりの数に上りました。

山岡 当時描かれた作品は今、私たちも見ることができるのでしょうか。

平松 それがとても残念なことに、ほとんど残っていないんです。

というのも、そのころ長屋に住んでいて、作品を保管する場所がなくて困っていました。

た。そこで、友人の農家の納屋で預かってもらっていたのですが、台風による暴風が納屋の屋根を吹き飛ばしてしまつて、すべて水浸しになって、すべての絵をだめにしてしまつたんです。

たくさん絵が消失してしまつたそのときのことを思い出すと、悔しさばかりがこみあげてきます。二〇一一年に名古屋市美術館で開いた回顧展では、その時代の作品だけは見ていただくことができました。

山岡 高校を卒業後は、愛知大学へ進学されます。画家を目指すには、美術大学に進学するのが自然な流れだと思うのですが、なぜ一般の大学に進まれたのですか。

平松 名古屋にはそうした美術系の大学がなかったというのも理由の一つでした。当時は、東京と京都、そして金沢にしかありませんでしたから。

さらに、今でこそ画家になろうと思えば美術大学に進むのが一般的ですが、当時は地域ごとに公募展の研究会有って、そこで画家としての教育を受けることができました。そのため、わざわざ美術大学に行く

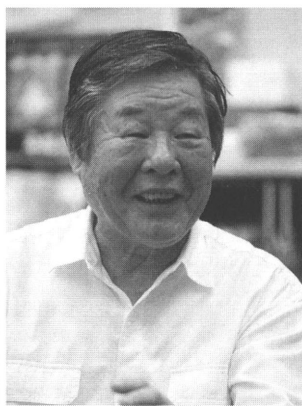
必要はないと考えていました。

僕は高校のときから研究会に入って、作品が入選していましたから、そこで絵の基礎を十分に学んでいました。学生の間は、もっと広い世界を見てみたい、美術以外の勉強もしてみたいと、一般の大学へ進むことにしたんです。

親への反発で法科は敬遠していたので、特に経済を学びたいという気持ちがありました。

大学の歴史、学風にひかれて 進学を決めた愛知大学

山岡 数ある大学の中で愛知大学を選んだ理由は何だったのでしょうか。



平松 礼二氏

平松 愛知大学は一九四六年の新設時に、中国や朝鮮半島、台湾から引き揚げてきた多くの教職員や学生を受け入れたという歴史があります。それが愛知大学を選んだ決定的な理由です。

いかにも大陸的で開放的な学校という感じがして、「広い荒野を目指す」という感じが気に入ったんです。加えて、そうした大学に入れば、美術の研究生活と学生生活の両方を充実できるのではないと思いました。

さらに入学してからのことですが、社会派の写真家、東松照明さんの母校であることも知りました。ジャンルは違いますが、東松さんは思想や夢をもちながら、自らの創作活動を貫かれた方です。僕も絵の世界で、自分の道を貫き通せば、絵描きとして世間に認められるのではと、とても勇気づけられたことを思い出します。

山岡 大学の雰囲気や学風などはいかがでしたか。

平松 自由な気風で、束縛するものは何もない。自分の力を養って、世界へ打って出る。まさに「青年よ、大志を抱け」という雰囲気の色濃くありました。

表面を飾らず、ありのままを表現する。そして、新しい日本画を求めてつねに挑戦し、探究する。そうした僕の画家としての心構えも、大学時代に養われたような気がします。当時は夜を徹して、安酒を飲みながら、友人たちと将来の夢について大いに語りました。

山岡 平松さんの作品はとてもテーマやご自分の世界観が明確なものが多くですね。そうしたご自身のテーマの探究という点でも、愛知大学での学びは影響しましたか。

平松 そう思います。逆に言えば、もし美術大学へ進学していたら、同じような探究心をもって作品を制作できたかという、難しかったのではないかと思います。おそらく学歴におぼれて、冒険心、探究心や好奇心は生まれなかったことでしょう。

山岡 法経学部を専攻されましたが、経済の学びのほうはいかがだったのでしょうか。

平松 今だから言えますが、資本論や経済原論などは、全くちんぷんかんぷんでした。なにしろ美術科出身でして、何回読んでも頭に入らない。これには困りました。でも、なんとか卒業だけはさせてもらいま

した。

山岡 平松さんは多摩美術大学の教授を務められたあと、了徳寺大学の学長にも就任されました。平松さんの目には、今の学生たち、さらには現在の教育は、どのように映りますか。

平松 今、あらゆる大学が職業人養成学校のようになってしまうような気がします。でも、大学の四年間で一番大事なことは、思想や哲学を身につけることだと思っんです。それが生きるうえでの骨格、人生を貫く行動原理になります。

今の学生はそれが十分に身につけていないような気がします。自分の目の届くぐらの範囲の中で暮らしていて、それで満足しているように見える。そこに寂しさを感じます。

山岡 その背景には何があると考えられますか。

平松 おそらく、人生に対する恐怖心をもちすぎているのでしょう。失敗すること、負けることへの恐れが大きいのではないかと思います。でも、少しぐら負けたっていいじゃないかというのが僕の意見で

す。一敗地にまみれても、そこから立ち上がればいい。それができるのが若さというものですから。

山岡 そういう気持ちの強さは、どのようにしたら会得できるのでしょうか。

**目先の対応策ばかり教えても
学生は逆風を乗り越える力を得られない**

平松 学生のしりをたたく教員の存在も重要でしょう。「チャンスは二度とないぞ」ということをしっかりと教える。そして「機会が訪れたら、ここから飛び出して先へ進んでいけ」と発破をかける。それが必要なのではないのでしょうか。

今の大学は真逆の方を向いているように



思えます。資格の取得や就職のことばかり重視しているのではないのでしょうか。

教育は「百年の計」です。長い人生の中には、失敗するときもある。逆境に苦しみときもある。目先の対応策ばかり教えても、学生たちはそうした逆風を乗り越える力を得られません。

これからはさらに寿命が延びるでしょうから、一〇〇年間の人間地図を描く知恵を教員が与えてあげることが必要です。その土台になるのが、独自の思想形成です。知識や経験は積み上げることができても、思想はそれができない。いかに大学生のときに意識して体得させるかが重要になってくるわけです。

山岡 その意味では、大学の教員の役割は極めて大きいですね。

平松 そういうことです。大学教員は、生活のためにその仕事に就くべきではない。そうあって苦言を呈したいですね。

夢や大きなスケールをもつ人間をつくるのが役目ですから、学生たちになるべく高い理想を与えてほしいですし、教員にはそこに注力してほしい。これはぜひ強調した

いところですよ。

山岡 それでは、平松さんのこれからの展望、夢について教えてください。

知らないことを知ることは楽しく

問題意識をもって学べる時間は得がたい

平松 今、僕は七三歳ですが、少年のころに描いていた画家像、そして夢はだいたいの実現したかなと思います。同時に、自分の興味の赴くままに勉強できた。そのおかげで、とても充実した時間を過ごすことができましたとも思います。

特に、韓国へはずいぶん通って、日本が経済成長する中で失ってしまった原風景を絵のモチーフにしてみました。加えて、その歴史も自分なりに、十分に学ぶことができました。これが僕には大きかったですね。振り返ると、その手始めに名古屋にいた夜間の在日韓国人居留民団学校に通ったこともありました。三〇歳ごろ、当時は偏見も強かった時代ですし、学校には日本人は全くいない。でも、自らそこを訪ねて、「自分も韓国の歴史を知りたい。日本人だけではないですか」と問い合わせたら、歓迎

され、在日韓国人の方と一緒に、朝鮮史の授業を受けることができました。

やがて、そこからハングル語、そして朝鮮民画の発生や時代的な変遷、朝鮮通信使などについて、独自に勉強をしてきました。知らないことを知ることは快感ですし、楽しかった。そのようにして、問題意識をもつて学ぶことができた時間は得がたいものだったと思います。

とはいえ、これで僕の人生は満足かと言ったら、そんなことはありません。今は、これからの五〇年の計画をつくろうと考えている最中です。そうなると一二〇歳を超えてしましますが、僕は欲張りですから、まだまだやることはあるんですよ。

山岡 人生の計画を立てて、その実現に向かって努力する。その重要性は若者たちにも教えたいですね。

平松 計画があると、意欲をわき立たせてくれますよね。気の赴くまま、ぶらぶら歩くのもいいでしょうが、目標を自分で立てて、そのために人生をかけて勉強していく。それが僕の性に合っています。その意味でも、これからの五〇年間、どのように

計画を立てられるか、正直、わくわくしているところです。

山岡 奥様の存在も重要でいらつしやるのではないのでしょうか。

平松 ずっと僕についてきてくれているので、少しくたびれているかもしれませんが、何だか申し訳ない気持ちもあるのですが、家内はかけがえのない相棒ですね。昨年の展覧会でフランスを訪れたとき、僕の靴と彼女の靴をスケッチブックで描いて、美術館に収めてきたんです。

山岡 これまで二人、同じ道を歩んでこられたということですね。

平松 そう。一緒に旅をしてきたんだのもちろん、その途中ではおれもめんどくさいですが、未知の世界へ探り出しの旅に出かけようとするときの、ざらざらと燃えてくるような気質は、お互い似たようなところがあるんです。

振り返ってみると、お互い努力をしてきて、何度も花を咲かすことができた。思いや成果を共有できた。それが良かったですね。これからは二人で新しい花をいくつも咲かせていきたいと思っています。